

---

## 13～19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容

---

Changes of Coast and Lagoon in Kamakura, 13th-19th Century

斎藤直子

[要旨] 今日、鎌倉の海岸線はなだらかな弧を描いており、港湾の立地に適してはいない。しかし、前近代においては港は都市に不可欠であり、中世の鎌倉の海岸地形は現在と異なっていたと推測される。そこで当地の平野部の微地形を分析し、景観の復原を試みたところ、今日海拔4m未満の地域は鎌倉期には水面下にあったという指標を得た。これにより、現在の地形との相違は滑川河口部において著しく、鎌倉期には

- (1)旧河口が今日よりも東側約400～500mの地点にあった
- (2)海岸部には砂丘(砂洲)が形成されていた
- (3)砂丘の内側(陸側)に広い水域を擁していた

ことなどがうかがえる。さらに、(1)～(3)について、その確かさと遡及性を検討するために、文献史料・絵図等と照合した結果、(1)は17世紀後半、(2)は15世紀中頃、(3)は鎌倉期にまで遡れることが確認できた。すなわち、鎌倉期の滑川河口部は、ラグーン(潟湖)を形成していたのである。このことは、港という視点から見ると、当時の鎌倉がかつての難波津と同様に、砂丘という言葉は天然の防波堤に守られた泊地・良港を有していたことになる。

しかし、1232年、和賀江島という人工の防波堤を築いたところ、その位置が由比ヶ浜を西から東へと海岸沿いに移動する砂(沿岸漂砂)をせき止める場所にあったため、その後急速に砂が堆積、かつては「浦」と呼ばれたラグーンの特性も次第に失われ、16世紀には「沼」と化し、明治22年(1889)頃に埋め立てられ、現在の海岸線を持つに至ったのである。

### 1. はじめに

鎌倉(神奈川県)は、鎌倉期における幕府の所在地として知られるが、鎌倉幕府滅亡後も政庁が置かれ、15世紀中頃まで関東の政治的中心地としての地位を占めていた。言い換えれば、鎌倉は中世都市の一つであり、特に13世紀から14世紀前葉までの間は、京都と並び立つ日本の首都であったと言える。

一方、近代以前の都市の大半は、海岸あるいは水量豊かな河川・湖沼沿いに位置した。当時の物資の大量輸送は多くを水運に依存しており、これらは港湾機能が都市の立地条件として不可欠であったことを裏付ける。

しかし、今日、鎌倉の海岸部(由比ヶ浜)では、波は荒く、海岸線はなだらかな弧を描いている。そのため、中世の文献史料には、船が多数寄港したことが記されてはいるものの、現状からその情景を想像することは難しい。

そこで、中世の港町の中には現在までに海岸地形が大きく変化した事例があることから、鎌倉についても、当時の景観の復原を試みることにした。

本稿は、以上のような問題関心から発しており、その復原方法と結果、および海岸部の変容過程